リルケの詩『アシャンティ』について

—笑ったのは誰か—

伊　藤　卓　立

I

問題提起：1991年6月29日に早稲田大学文学部第二会議室において開催された「十九世紀ドイツ文学研究会」が主催する「第61回研究発表会」において「リルケにおける『檻』の世界　—ふたつの詩『アシャンティ』と『豹』をめぐって—」という研究発表が慶應義塾大学の秋田静男によって行われた。そのレジメは同研究会の『第61回研究会報』に掲載され，[1] また，その口頭発表に基づいた論文は，慶應義塾大学文藝会の機関誌『文藝研究』第61号に掲載され，[2] 現在では慶應義塾大学学術情報リポジトリ上に公開されている。[3]

ところで，『研究会報』には「秋田氏によるリルケの詩の解釈については，ご出席のリルケ専門家からも詳細な質問がなされました」，[4] と報告されている。このリルケ専門家とは著者のことであったが，質問の対象は詩「アシャンティ」の第10行目の詩句 „und die Munde zum Gelächter breit“ についてであった。この詩句の解釈は，『研究会報』では曖昧であるが，『文藝研究』では次のように明確に述べられている。

> この詩は，アフリカ西部の黄金海岸地帯からパリに移され，動物園で見世物にされている黒人の女を描いている。ここに登場するアシャンティの女達は，故郷を遠く離れ今はブローニュの森の一隅で多くの人間の目に晒されている。このような檻の中で生きているうちに，この女達は既に自らの感情を忘れ，今では自分達の素朴さや純粋性をも忘れ去ってしまっているようだ。鋭く燃え上がる目の輝きも失ってしまい，見栄も体裁も忘れて大笑いしている。そして，白人と一種の諒解を取り交わしているという。それは，この詩の標題に「馴化園」，す

なわち土地の風土やその環境に慣らすための施設という副題が添えられている通り，まさにこの女達はパリの環境に馴化されてしまったということなのであろうか。彼女達は，都会の人間の目に晒されて周囲に迎合し，既に自らに対する誇りの一かけらも持ち合わせておらず，醜い姿を晒しているのである。そんなアシャンティの女達を見ていると，ひどく心許無く怖ろしいのであった。[5)]

すなわち，問題の詩句を秋田は，人類学的な「馴化」と称して，アフリカからパリへと強制移動させられ，今や動物園の檻の中に閉じ込められ，このようにして人格を否定され，その結果生命の躍動をも失い，まるで魂のない抜け殻のような「見世物」として優越感に浸る白人たちの目に晒されているアシャンティの女たちが「見栄も体裁も忘れて大笑いしている」，と解釈しているのである。しかし，この解釈には，語学的な追求をする以前に，先ず内容的に，このような「大笑い」(Gelächter) はそもそも「見世物」として人格否定されているアシャンティの女たちに可能なのか，もしもそうであるならば，それは，アシャンテイの女たちが狂気に陥っていることを意味するであろう。それ故，むしろ，「大笑いしている」のは「うぬぼれ」(Eitelkeit) にとらわれている「白人たち」(die hellen Menschen) ではないのか，という意味内容上の疑問が語感から直感的に浮かぶ。

更にこの疑問を強めたのは，秋田の発表から 15 年後にウルリッヒ・ベールが出版した „Das Rilke-Alphabet“ において詩「アシャンティ」に関する次の一文である。

In Hölderlins Gedicht ging es, so der Kommentar von Martin Heidegger dazu, um das »Heimischwerde[n] im Eignen« durch den Kontakuto mit dem Fremden. Darum geht es Rilke auch. Doch seine Projekitionen auf die Afrikaner versagen in dem Moment, in dem diese den Europäern entgegenlachen.[6)]

(ヘルダーリンの詩[7)]において重要なことは，ハイデガーの注解によれば，異邦者との関連を結ぶことによって「自己の中で郷土となること」[8)]である。このことはリルケにとっても重要なことである。だがしかし，アシャンティの女たちへのリルケの心の投影は，アシャンティ

の女たちが白人たちに迎合の笑いを示す瞬間に頓挫する。)

ハイデガーを引用することで自分の解釈に安易な権威付けを行ったベールは，アシャンティの女たちが「白人たちに迎合の笑いを示す」(den Europäern entgegenlachen)，と言っているのであるから，ベールも秋田と同様に，「大笑い」しているのはアシャンティの女たちである，と解釈しているのは明らかである。それ故，ベールの場合も，秋田の場合と同じ疑問が未解決のまま残る。

そこでこの小論では，「大笑い」したのがアシャンティなのか，白人なのか，という疑問を明らかにし，リルケ研究にささやかな寄与をしたい。

II-1

リルケの詩「アシャンティ」(Die Aschanti) は現在『形象詩集』(Das Buch der Bilder) に納められているが，1902 年 7 月にアレックス・ユンカー書店から出版されたその第一版には，1898 年から 1901 年までに作られた 45 編の詩が納められていた。しかし，その中に「アシャンティ」は含まれていなかった。すなわち，1906 年 12 月に出版されたこの詩集の第二版には，1902 年から 1906 年までの間に作られた 37 編の詩が増補されたが，「アシャンティ」はその中の 1 編であった。[9] この第二版にリルケ自身は満足したようで，アクセル・ユンカー宛の手紙で次のように言っている。

> 全く自然に発せられる正に真摯にして説得力のある作用によって，『形象詩集』に私は驚きました。活字やポイントの選択，版組，これら全てが最善の意味で目的に即していることは明らかです。実際，嬉しいことに，多くの詩は第一版よりもさらに良くなっています。唯美的要請が退けられたことは効果的です。[10]

リルケの意にかなった第二版に更にリルケ自身が校閲を加えた，いわば『著者校閲決定版』ともきいうべき第五版が 1913 年にインゼル書店から出版された。そして，『リルケ全集』(SW) の編集に際してこの第五版を底本としたエルンスト・ツインは，„Endgültige Durchsicht des Textes für die fünfte Auflage: 1913“，と注を付けている。[11] また，注 9 で言及されて

いる『注解リルケ選集』(KA) でも第五版が底本とされ，„die 5. Auflage erstmals im Insel-Verlag: Leipzig 1913 (für den Druck wurde der Text von Rilke neu überprüft)“，という注が付けられている。[12] それ故，『全集』も『選集』も「アシャンティ」のテクストに関して異同はあり得ない，と考えられるが，それにもかかわらず，両者の間にわずかな差異が一カ所見いだされ，このテクストクリティークの差異がとりもなおさず問題の詩句の解釈の差異の存在の可能性を示唆している。

そこで，先ず初版が 1955 年に出版された『全集』と初版が 1996 年に出版された『選集』のテキストを比較し，問題の姿を明らかにしたい。先ず『全集』では「アシャンティ」のテキストの全体は次のようになっている。

Die Aschanti
(Jardin d'Acclimatation)

Keine Vision von fremden Ländern,
kein Gefühl von braunen Frauen, die
tanzen aus den fallenden Gewändern.

Keine wilde fremde Melodie.
5 Keine Lieder, die vom Blute stammten,
und kein Blut, das aus den Tiefen schrie.

Keine braunen Mädchen, die sich samten
breiteten in Tropenmüdigkeit;
keine Augen, die wie Waffen flammten,

10 **und die Munde zum Gelächter breit.**
Und ein wunderliches Sich-verstehen
mit der hellen Menschen Eitelkeit.

Und mir war so bange hinzusehen.

O wie sind die Tiere so viel treuer,
15 die in Gittern auf und niedergehn,
ohne Eintracht mit dem Treiben neuer
fremder Dinge, die sie nicht verstehn;
und sie brennen wie ein stilles Feuer
leise aus und sinken in sich ein,
20 teilnahmslos dem neuen Abenteuer
und mit ihrem großen Blut allein. [13)]

次に『選集』から「アシャンティ」のテキストを引用するが，相違は第10行目だけなので，理解を助けるために，第3連，第4連，および，わずか1行で一連を形成する第5連をも共に引用しておく。

Keine braunen Mädchen, die sich samten
breiteten in Tropenmüdigkeit;
keine Augen, die wie Waffen flammten,

und die Munde zum Gelächter breit.
Und ein wunderliches Sich-verstehen
mit der hellen Menschen Eitelkeit.

Und mir war so bange hinzusehen. [14)]

『全集』と『選集』との相違は明らかである。すなわち，『選集』の第10行目の印刷は普通であるが，他方，『全集』の第10行目では，前連の最終行（第9行目）がコンマで終わり，第10行目の先頭で用いられている並列の接続詞 und は小文字で始まっているのにもかかわらず，一字分下げて印刷されている。それ故，『全集』では，外見上はコンマで終わっている第9行と小文字で始まっている und によって接続されている第10行との間には密接な結びつきが予感させられるにもかかわらず，第10行が一字分下げて印刷されているのであるから，第9行と第10行との結びつきは弱くなり，新しい詩想が第4連において展開されている，と考えることが

できる。他方，第 10 行の先頭の und が普通に印刷されている『選集』では第 9 行と第 10 行は密接に連結し，両連は連続して同じ詩想を形成している，と解釈されたことになる。しかし，実際，『全集』のテキストの形態はやはり普通ではない。この場合，一番安易で簡便な解決法は，『全集』のテキストクリティークが誤りを犯しているので，『選集』においてその誤りが訂正された，と解釈することである。しかし，『全集』の編者であるエルンスト・ツィンと出版社のインゼル書店はこの『全集』を将来の歴史批判版全集の前段階として位置づけ，その編集方針として次の四項目を挙げている。[14a)]

1 Vollständigkeit der aufgenommenen Texte
2 zuverlässige Textgestaltung
3 Rangabstufung der Werke im Sinne des Dichters bie der Anordnung des Ganzen
4 Einhaltung der zeitlichen Folge innerhalb der einzelnen Abteilungen

そこで，我々は，第二項目 „zuverlässige Textgestaltung“ に注目し，第 10 行目の先頭で用いられている並列の接続詞 „und“ が一字分下げられて印刷されている『全集』の「テキストの形態」を「信頼にたる」，として尊重したい。すると，問題点は，並列の接続詞 „und“ が一字分下げて印刷されている理由は何か，という点に絞られる。

II-2

そこで次に，歴代の日本語訳を参照し，その解釈を検討したい。

1) 生野幸吉訳 （旧版 1961 年，新版 1973 年）
熱帯的な倦怠のなかで　びろうどのように
身をひろげるとびいろのむすめらはなく
兇器のように焔立つ瞳もなく

口はただ哄笑のためにひらいていた
白人の虚栄との

奇妙な諒解があったばかりだ[15)]

2) 富士川英郎訳 (1967年)
熱帯の倦怠のなかで
ビロードのように身を拡げた褐色の少女たちも
兇器のように燃え上がった眼もない

そして哄笑にひろがる口と
白人種の虚栄との
奇妙な了解があるばかりだ[16)]

3) 上村弘雄訳 (1990年)
熱帯のけだるさにビロードのように伸びきった
褐色の少女らもいない
武器のように燃えあがった瞳もない

哄笑のために大きく開いた口。
白人種の虚栄との
奇妙な諒解。[17)]

4) 富岡近雄訳 (2003年)
熱帯の倦怠のうちでビロードのように
体を拡げたいずれの褐色の乙女たちもなく,
武器のように炎を噴いたいずれの眼もない。

そして口は笑うために大きく開く。
そして白人たちの虚飾との
不思議な了解が。[18)]

初版が1996年に出版された『選集』を参考にすることができたのは富岡訳のみであるが, 富岡訳には「笑うために大きく開 (いた)」口が一体誰の口なのか, という問いに対して曖昧さが残るが, 笑っているのはアシャ

ンティの女たちである，と富岡は解釈している。

上村訳にも曖昧さは残るが，句読点の使用から考えると，笑っているのはアシャンティの女たちである，と上村も解釈している。

生野訳と富士川訳では原文のインタープンクツィオーンは反映されていないので，曖昧さは残るが，やはり笑っているのはアシャンティの女たちである，と両者も解釈している。

このように，歴代の日本語訳では，笑っているのはアシャンティの女たちである，と解釈されているので，秋田もこの解釈の伝統を引き継いでいる，といえる。

II-3

ところで，„Gelächter“ の日本語訳として「笑い」を用いた富岡以外の三人生野，富士川，上村は「哄笑」を用いているので，「哄笑」の意味を辞書で確認しておきたい。

1）大わらひ。たかわらひ。
（上田万年，他 4 人編：『大辞典』 講談社　1972 年。）
2）大口をあけて笑うこと。大笑。おおわらい。
（新村出編：『広辞苑』 岩波　1969 年。）
3）大口をあけて笑うこと。大声で笑うこと。たかわらい。・・。
「見えざるところよりメフィストの喚笑聞ゆ」（メフィストフェレス登場）（佐藤春夫：『殉情詩集』初版，復刻版　大和書房　1966 年。）
（『日本国語大辞典』第二版　第五巻　小学館　2001 年。）
4）大口をあけて笑ふこと。又，おほわらひ。たかわらひ。
諸橋轍次：『大漢和辞典』第二巻　修訂第二版　1989 年。）

上記の辞書の説明はあまり明確ではないが，「哄笑」とは「大笑い」と「高笑い」に集約できる。

しかし，「大笑い」も「高笑い」もまだ曖昧な点があるので，国語辞典を調べて更にその厳密な意味を明らかにしたい。

1）大笑い：

①大声で笑うこと　②ひどく物笑いとなること。(広辞苑)

①声高く笑うこと。　②ひどく人の物笑いになるさま。(日本国語大辞典　第二巻)

2）高笑い：

①大声で笑うこと。②哄笑。(広辞苑)

①大声で笑うこと。声高く笑うこと。たかえみ。たかえ。哄笑。(日本国語大辞典　第八巻)

以上二冊の辞書の説明に従えば,「高笑い」には否定的ニュアンスはないが,「大笑い」には「高笑い」と同様に,「声高く笑う」,という肯定的なニュアンスと,「ひどく（人の）物笑いと（に）なる」,換言すれば,「(軽蔑すべき)対象をひどく物笑う」,という否定的なニュアンスがあることになる。そこで,更に国語辞典で調べてみると,「物笑い」は次のように説明されている。

1）『広辞苑』：

①物事を笑うこと。　②他人の言行を見聞して嘲り笑うこと。

また,その対象。

2）『日本国語大辞典』第十二巻：

①物事をわらうこと。何かにつけてよく笑うこと。②あざけり笑うこと。また,あざけり笑われること。あるいは,そのような行為や,その対象。わらいぐさ。

これらの説明に従えば,「哄笑」が「嘲り笑う」ことを意味し得ることは明らかである。それ故,最終的に「哄笑」には肯定的な「高笑い」の用法と,否定的な「嘲り笑い」の用法があることになるが,上で引用した日本の訳者たちが「哄笑」を肯定的な意味で用いているのか,否定的な意味で用いているのかは,明確ではない。

II-4

そこで次に „Gelächter“ を辞書で確認したい。

1）独和辞典

1 － 1）『大独和辞典』博友社　1958 年 / 1969 年

①（絶え間ない笑い）声；哄笑。②物笑いの種，笑い種。

1 － 2）『独話言林』白水社　1968 年

①哄笑，大笑い。②笑いの種，笑草。

1 － 3）『小学館独和大辞典』小学館　1985 年

①大きな笑い声，爆笑。②物笑いの種。

1 － 4）『独和中辞典』岩波書店　1996 年

①（絶え間ない）大笑い，哄笑。

1 － 5）『フロイデ独和辞典』白水社　2003 年

①お笑い，高笑い，哄笑。②物笑いの種。

以上五冊の独和辞典の中で四冊までが「哄笑」を用いているので，日本の翻訳者たちが「哄笑」を用いたことは理解できる。しかし，これらの辞書の説明を読んだところで，„Gelächter“ の主体は誰であるのか，また，„Gelächter“ が肯定的な，あるいは否定的な意味で用いられているのか，という疑問に関しては全く曖昧のままである。

なお，これらの辞書では，「哄笑」は，第一に肯定的な「高笑い」と同じ意味であり，第二に，上で参照した国語辞典と同様に，「物笑いの種」，すなわち，「笑らわれる対象」を指し示すと，説明されている。

2）現代ドイツ語辞典

2 － 1）Klappenbach [19)]

① das (fortwährende) laute Lachen. ② Spott, dazu Hohnspott, Höllenspott, Spottgelächter.

2 － 2）Brockhaus-Wahrig [20)]

① lautes Lachen, Heiterkeitsausbruch. ② Gegenstand, Objekt des Lachens.

2 － 3）Duden [21)]

① lautes (anhaltendes) Lachen. ② Gegenstand, Anlaß des Lachens.

以上三冊の辞書の説明に従うと，„Gelächter“ は，第一に「高笑い」(Heiterkeitsausbruch) を，第二に「物笑いの対象」(Gegegstand des Lachens)

を意味し，当然ではあるが，上で引用した独和辞典の説明と一致する。また，クラッペンバッハの „Spott, dazu Hohnspott, Höllenspott, Spottgelächter“ という説明は，他の二冊にはない，特にブロックハウス＝ヴァーリッヒの „Heiterkeitsausbruch“ に反した唯一の際だった説明である。

3）少し古いドイツ語辞典

3 － 1）Adelung (1775) [22]

① ein schallendes, starkes Lachen. ... Ihr schadenfrohes Gelächter schärfte den Schmerz, den ich empfand. ② der Gegenstand eines solchen Gelächters. ... Andern zum Gelächter werden, von ihnen verlachet werden. ... „Seine närrische Eitelkeit wird ihn noch oft zum Gelächter machen“, (Sonnenfels)

3 － 2）Grimm (1897) [23]

das ist ein spottendes gelächter, ein auslachen(.)

3 － 3）Heyse (1833) [24]

ein laut schallendes starkes, bes. ein vielfaches Lachen; auch f.(=für) Gespött, oder Gegenstand des Spottes, (Andern zum Gelächter werden).

3 － 4）Heyne (1906) [25]

anhaltendes oder wiederholtes Lachen, ...; fröhliches, spöttisches, höhnisches gelächter; Spott, Hohn(.)... Gegenstand des Lachens(.)

アーデルングとハイゼの辞書で使用されている „Gelächter“ が「物笑いの対象」を意味する場合の用例 „Seine närrische Eitelkeit wird ihn noch oft zum Gelächter machen“ (Sonnenfels)，„Andern zum Gelächter werden“ に従うと，「口」を「物笑いの対象にする」，あるいは，「口が」「物笑いの対象になる」は意味が成立しないので，„Gelächter“ が「物笑いの対象」を意味する，という説明は当該の論考の対象にはならない。それ故，問題の „Gelächter“ は „Lachen“ の範疇で理解されねばならない。しかし，ハイネの辞書に掲載されている非常に明快な用例（fröhliches, spöttisches, höhnisches gelächter）から明らかなように，„Gelächter“ には正反対の意味合いが内蔵されている。„Gelächter“ のこの両極性の肯定的側面はブロックハウス＝ヴァーリッヒの „Heiterkeitsausbruch“ によって示され，否定的側面はク

ラッペンバッハの現代ドイツ語辞典の „Spott, dazu Hohnspott, Höllenspott, Spottgelächter“ によって示されていた。この否定的側面は，ハイゼの辞書では „Gelächter“ は „Gespött“ の代わりに用いられる，と説明され，ハイネの辞書では „Gelächter“ は „Spott, Hohn“ である，と断定されているが，更に „Gelächter“ の意味のこの二面性を明確に説明しているのはエーベルハルトの『同意語辞典』である。そこでは次のように言っている。

> Das Gelächter kann harmlos, fröhlich, aber auch höhnisch und spöttisch sein (daher: Hohngelächter, Spottgelächter u.a.).[26]

エーベルハルトのこの説明に従えば，„Gelächter“ には „harmlos, fröhlich“ な笑い，すなわち „Heiterkeitsausbruch“ と，„höhnisch und spöttisch“ な笑い，すなわち „Gespött, Spott, Hohn“ と正反対の意味合いが存在することは明らかである。

III

ここで，以上の辞書の説明をまとめ，更に新たな問題提起をしたい。

1）『相良　大独和辞典』では „Heiterkeit“ は「晴朗，上機嫌，快活，陽気，哄笑」，と説明されているので，この小論では „Gelächter“ の肯定面を示す „Heiterkeitsausbruch“ は，「晴朗快活な高笑い」という日本語にしたい。
2）„Gelächter“ の否定面を示す „Gespött, Spott, Hohn“ であるが，ハイネの辞書では „Gespött“ は „das Spotten“ と説明され，[27] グリムの辞書では „Spott, Verspottung“ と説明されているので，[28] „Gelächter“ の否定面は „Spott, Hohn“ としたい。

ところで，いずれ当該の „Gelächter“ の意味を決定する際に必要となるであろうから，ここで „Spott“ と „Hohn“ の意味の差異を確認しておきたい。

ハイゼの辞書では両語の相違を次のように説明している。

> Spott ... ehemals Scherz, Spaß (daher: ohne Spott für im Ernst, aufrichtig); jetzt in engerer Bedeutung, die Äußerung des Vergnügens über Anderer

Fehler oder Schaden, besonders in beißenden oder witzigen Worten, um sich und Andere zu belustigen, verschieden Hohn, welches den Nebenbegriff der stolzen Verachtung hat(.)[29]

この説明に従えば，„Spott“ は，他人の失敗などを辛辣に皮肉を込めて揶揄する際の笑い，すなわち，十全ではないが，「さげすみわらうこと。せせらわらうこと。あざわらい」と説明される「冷笑」，[30] あるいは，「軽蔑して笑うこと。せせらわらい。嘲笑」と説明される「軽笑」[31] に翻訳することもできる。他方，„Hohn“ は，これも十全ではないが，「あざけり笑うこと。からかい笑うこと」と説明される「嘲笑」に翻訳することもできる。このように，国語辞典の説明では「冷笑」（軽笑）と「嘲笑」の間には大きな差異は存在していないが，ドイツ語辞典の説明では両者の間には大きな相違が存在し，„Hohn“ には「うぬぼれた（高慢な，尊大な）軽蔑という副次的意味」を伴うのである。この説明を更に補強すれば，次のようになる。

1）Pinloche の語源辞典の説明：„höhnen“ = „spottend verachten“[32]
2）Eberhard の同意語辞典：„Die Absicht des Hohnes (eigentlich Schmach, Erniedrigung) hingenen ist, Verachtung auszudrücken.“[33]
3）中條宗助の『ドイツ語類語辞典』：„Spott“ は「他人の欠点や不完全な点について，ざまあ見ろと喜び，軽蔑の表現をし，他人の感情を茶化す態度である」，„Hohn“ は「公然たる Spott に結びついた，あからさまな軽蔑の発言で，同時に自分の優越感が表現されている。」[34]

それ故，問題は，「尊大な軽蔑」がその笑いによってあからさまに表現されているのか，いないのか，ということになる。

IV-1

当初の「尊大な軽蔑」をあからさまに表現した笑いを発しているのは誰か，という問題の解決に更に接近するために，ここで，„Aschanti“ の正体を明らかにしておきたい。1897 年にオーストリアの著述家ペーター・アルテンベルク（Peter Altenberg）は „Ashantee. (Im Wiener Thiergarten bei den Negern der Goldküste, Westküste.)“ を出版した。アシャンティ族は当時

のヨーロパ人にとって一般的には未知の存在であったのであろう，それ故，アルテンベルクは本文の前にマイヤーの百科事典のアシャンティの項 (Meyer, Conversations-Lexikon. Band I., Seite 900) を引用している。そこで，我々もそれを参照したい。

> Negerreich in Guinea, Westküste, Goldküste. Wurde von den Engländern 130 Kilometer von der Küste zurückgedrängt. Hauptsitz der englischen Colonie an der Küste: Accra.
> Der Boden des Landes ist meist leichter Lehm. Das Klima gemässigt. Zweimal im Jahre, Ende Mai, Ende Oktober, Regenzeit. Die nutzbarsten Baume der Wälder：Palmen, Gummibäume, Hauptnahrung: Yams-Wurzel (eine unserer Kartoffel ähnliche Pflanze). Die Aschanti sind echte, kraushaarige Neger, welche das Odschi sprechen; sie sind namentlich im Teppichweben und in Goldarbeiten sehr geschickt. Es herrscht Vielweiberei. Die Religion ist Fetischismus. Die mysteriöse Aufgabe der Priester besteht hauptsächlich darin, die bösen Genien durch geheimnisvolle Ceremonien und hysterische Tänze zu beschwichtigen. Hauptstadt von Aschantee: Coomassie. General Wolseley rückt 4. Februar 1874 in Coomassie ein; der König räumt alle Küstenpunkt und gelobt Abschaffung der Menschenopfer.[35)]

マイヤーの百科辞典の説明によってアシャンティ族の風土の輪郭を知ることはできるが，アシャンティ族の気質なりの説明は不十分である。そこで，同じく当時リルケが参考にすることができたと考えられるピーパーの百科事典に掲載されている説明を参照したい。

> Die Aschanti gehören zu den cultiviertesten Negern und bewohnen zahrreiche, große Städte ... sind von schöner Gestalt, schmücken sich durch Tättowieren und Gold- und Elfenbeinringe, sind sehr kriegerisch und muthvoll, ...; sie lieben Tanz und Musik, kennen das Damenspiel, begeben ihre Begräbnisse sehr feierlich, stellen aber häufig Menschenopfer an(.)[36)]

これら二冊の百科事典を読むと，アシャンティ族の生きた姿の輪郭が見えてくるが，特にピーパーの „sie lieben Tanz und Musik“ という説明はリルケの詩 „Die Aschanti“ の第 1 連から第 3 連までの背景を読者に生き生きと想起させることができる。

ところで，リルケはアルテンベルクに愛好を示していた。ルー・アルベルト - ラザールは次のように言っている。

> Karl Kraus, ... Stefan Zweig und natürlich die Fürstin von Thurn und Taxis und Kokoschka, ... mit dem Rilke schon zuvor eine Zeitlang verkehrt hatte, dessen phantastische Persönlichkeit ihn faszinierte; auch Peter Altenberg fehlte nicht, dieses Symbol der Wiener Kaffeehausbohéme.[37)]

この報告に従えば，リルケがアルテンベルクの „Aschanti“ を手にした可能性は考慮されねばならない。さらに，アルテンベルクと同等にアシャンティに対してリルケの注意を向けさせた可能性があるのはリリエンクローンである。『選集』には次のような注解が見いだされる。

> Im deutschsprachigen Raum stehen für eine solche (= impressionistisch) Dichtung vor allem die Lyrik der vom jungen Rilke sehr geschätzten Detlev von Liliencron und die Prosaskizzen des Wiener Peter Altenberg) ein.[38)]

この注解も，リルケがアルテンベルクの „Aschanti“ を読んだ可能性を認めているが，「若きリルケ」が大いに評価したリリエンクローンに関してリルケは，1896 年 11 月 29 日付け，リヒャルト・デーメル宛の手紙において，次のように書いている。

Ich habe vor, wenn ich um Weihnachten für ein paar Tage in meine Heimatstadt, Prag, reisen sollte, dort einen Vortrag zugunsten Liliencrons zu halten und Stellen aus den „Gedichten", den „Kriegsnovellen", dem „Heidegänger" und „Poggfred" vorzutragen, beziehentlich vortragen zu lassen.[39)]

ここでリルケが言及しているリリエンクローンの作品の中で我々のコンテクストにとって重要なのは „Haidegänger" である。なぜならば，1895 年に出版された „Der Heidegänger und andere Gedichte" に „Sommermittagsspuk" という散文があり，そこに „Aschanti" という言葉が使用されているからである。そこでは次のように言っている。

Eine Prozession, ein Schnellläufer, siegreich zurückkehrende Truppen, ein deutscher Professor mit seinen Werken unter'm Arm, ein gefangener **Aschanti**-Häuptling, ein Verbrecher auf seinem letzten Gange, ein ausländischer König, eine deutsche Schützengilde mit ihren Fahnen und Saufhörnern und Biercantaten.[40)]

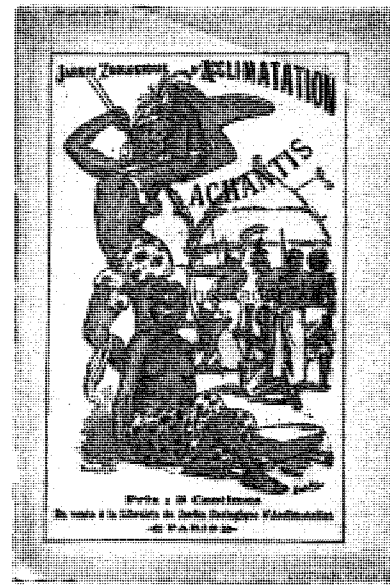
リルケは予定されている講演の中にこの一冊を含めているのであるから，リルケがリリエンクローンの „Sommermittagsspuk" において，„Aschanti" という言葉に出会った可能性は高い。

IV-2

1874 年にイギリスによって西アフリカの黄金海岸一帯，現在のガーナ，が征服された後，民俗学の名を借りた人間の見世物としてアシャンティ族のグループはヨーロッパ中を 1896 年から 1898 年にかけてヴィクトール・バウムベルク (Viktor Baumberg)[41)] によって引き回されたが，[42)]『注解リルケ選集』では次のような注が付けられている。

Um die Jahrhundertwende bereiste eine Gruppe der Aschanti verschiedene europäische Hauptstädte und führte dort, quasi als ethnologisches Anschauungsobjekt in seiner >natürlichen< Umgebung, in den Tiergärten

Tänze und >afrikanisches Volksleben< vor.[43)]



この一行がウィーンにやってきたのは1896年であったので，先に言及したアルテンベルクはこの機会の体験を „Aschantee. (Mit Wiener Thiergaten bei den Negern der Goldküste, Westküste.)“ において手紙と会話を折り混ぜてエッセイ風に仕立てたのであるが，我々のコンテキストにとって重要なことは，„Wiener Thiergaten“ というサブタイトルである。リルケの詩 „Die Aschanti“ には „Jardin d'Acclimatation“ というサブタイトルが付いているが，仏和辞典で „Jardin d'Acclimatation“ は，「順化園；特にパリのブローニュの森にある動物園を指す。㊟：acclimatation は人為的な順応，acclimatement は自然の順応」，と説明されている。[44)] それ故，パリのブローニュの森にある „Jardin d'Acclimatation“ と „Wiener Thiergaten“ は内容的には全く同じである，と言える。

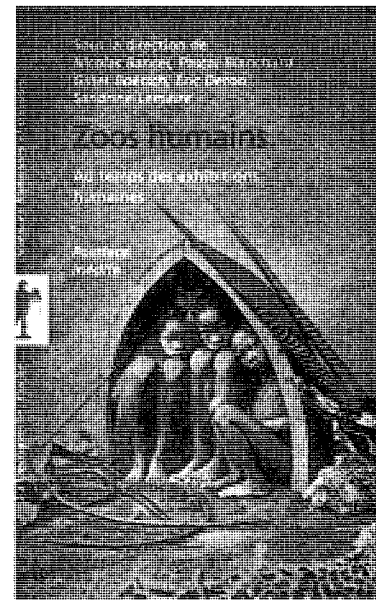
ところでアルテンベルクはサブタイトルに加えて献辞を捧げている。

Meinen schwarzen Freundinnen, den unvergesslichen „Paradieses-Menschen“ Akolé, Akóshia, Tíoko, Djôjô, Nāh-Badùh gewidmet.

アルテンベルクが „Paradieses-Menschen“ という言葉を用いているように，アシャンティ族の人々はアフリカという常夏の「パラダイス」から雪も降り，氷も張る寒いヨーロッパの気候風土に人為的に，換言すれば，強制的に，しかも更に悪しきことに「人類学」という一見高級そうに響く言葉の元に，他方ヨーロッパ人たちの長年にわたる植民地支配，人種的偏見，自己満足，虚栄，自尊，うぬぼれの元に，順応させられたのである。このような状況下でアシャンティ族の人々は，動物園の中に設置された順化園と

Série N° 6
Vues Stéréoscopiques Julien Damoy

いう柵で囲まれた区域に閉じ込められ，ヨーロッパ人たちの好奇と自尊の眼差しに晒されたのである。



ところで，ニコラ・バンセル (Nicolas Bancel) の編集の元に „Zoos humains. Au temps des exhibitions humaines“ が 2004 年に出版されたが，[45] „Zoos humains“ というタイトルは，„Paradieses-Menschen“ を強制的に訓化する，という非人間的な空間を見事に言い当てている。しかし，この „Zoos humains“(人間動物園）の状況は想像を超えて遙かに悲惨であった。ウングラウプは次のように伝えている。

> Eingeborenen-Tänze, Volksleben, afrikanische Kriegsaktionen, natürlich auch entsprechende Erotik - so wie sie die Europäer wünschten, erwarteten und bezahlten - wurden in diesem „menschlichen Zoos“ vorgeführt.[46]

すなわち，金さえ払えば，アシャンティの女たちによって „Erotik“ さえもショウとして演じられた，というのである。ところで，『独和言林』では „Erotik“ は次のように説明されている。

1) エロスの作用，恋愛（Sexualität <官能の愛，肉欲>に対し，精神・感情の面を含めての求愛体験。）
2) 性愛

ここではこの説明で良しとし，„Erotik“ の意味をこれ以上追求することはやめておく。すると，「官能の愛，肉欲」ではなく，「精神・感情の面を含めての求愛体験」をわざわざ金を払って，「囲い」の外からどのように体験することができるのか，全く疑問である。そのような無

駄金は使われない。むしろ，「囲い」の外にいるヨーロッパの男たちにできること，また，「囲い」によって隔離されているアシャンティの女たちにできること，そして，金を払う価値のあることといえば，「性愛」ショウを演じること，それを「囲い」の外から鑑賞することである。ヨーロッパの男たちは金を払って，アシャンティの女たちの「性愛」ショウを見物したのである。

この場面は，オペラ『カルメン』の主人公カルメンに関するある解説を思い起こさせる。

> Zigeuner sind von exsotischem Reiz, vornehmlich in einer Welt, die ihre Reize verloren hat; ... eignen sich die Frauen vortrefflich als Lustobjekte jener Männer, die bei ihren eigenen Frauen die Wünsche, die sie in Wahrheit haben, nicht zu artikulieren wagen.[47)]
> （ジプシーには，特に魅力を失ってしまった世界では，エキゾティックな魅力がある。・・・男たちが心底抱いている願望があっても，それを自分たちの女たちをまえにしては口に出して言うことができない男たちの快楽の対象としてジプシーの女たちは正に適切なのだ。）

すなわち，ビゼーの『カルメン』は 1875 年に初演されたが，ほとんど時を分かたずしてカルメン以上にカルメン的なアシャンティーの女たちが現実の舞台に現れ，「魅力を失ってしまった」旧世界の男たちの目には「快楽の対象」と写った，ということである。

さらに，我々のコンテクストにとって，アシャンティに代表されるアフリカ人に対する性にまつわる欧米人の偏見をジョン・スタインベックの『アメリカとアメリカ人』に見ることは有益である。

> In the antebellum South, it was generally known that the Negroes were, by and lage, physically strong and virile, and that, as with most physically strong people, they were sexually potent and active. ... it was generally concidered that Negroes were just that way − strong and sexy − (.)[48]
> (南北戦争後の南部では，一般に黒人たちは，だいたいにおいて，肉体的に強靱であり性的能力が強いと，また，非常に肉体的に強靱な人々の場合と同様に，彼らは性的に能力が高く，盛んであると，考えられていた。)

南北戦争は 1861 年から 1865 年にかけて行われたわけであるから，南北戦争後ということであれば，アシャンティ族の人々がヨーロッパの地を巡回して「展示」された時代とほぼ一致するので，スタインベックが伝えるアメリカの黒人奴隷の性に関する見解は，パリの „Jardin d'Acclimatation" に設置された „Zoos humains" に群れ，「性愛」ショウを見物する西洋人の男たちのアシャンティ族の女たちに関する見解とかなり一致していると，考えることができる。

リルケは，西洋の男たちが金を払って見物するアシャンティの女たちの「性愛」ショウの体験は，第十悲歌の中で，「天使ならば跡形もなく踏みつぶしてしまうであろう」といわれる「苦悩の都市」(Leid-Stadt) で開催される「慰めの市」(Trostmarkt) に連なるさまざまの出店のなかで，その先は「不死」(Todlos) のポスターが貼られている板塀で行き止まりになっている最後の出店に姿を変えて，次のように比喩的に表現されている。

> ... Für Erwachsene aber
> ist noch besonders zu sehn, wie das Geld sich vermehrt, anatomisch,
> nicht zur Belustigung nur: der Geschlechtsteil des Geldes,
> alles, das Ganze, der Vorgang —, das unterrichtet und macht
> fruchtbar .....[49]

（・・・しかし大人たちは
さらに特別に，金が繁殖する様子を，単に娯楽としてではなく，
解剖学的に，見物することができる，つまり，金の性器を，
一切を，全体を，全行程を　―，これは教えにとみ，
人を裕福にしてくれる・・・・・・・・・・）

ここでは，„Geschlechtsteil des Geldes“，„Für Erwachsene“，„anatomisch“，„alles“，„das Ganze“，„der Vorgang“　によって，まさか「年の市」で金融・経済学の講義が行われているわけはないので，金を払って見物できる解剖学的に微に入り細にいる「性愛」ショウが間接的に表現されている，と考えるべきである。

IV-3

表面上は紳士然を装い，「法權や集團や自由や徳義など／顔美(よ)き仮面」[50]を身につけながら，内実は，ニーチェをして「神は死んだ」[51]と言わざるを得ない程，堕落し，ジャポニズムの大波にのみ込まれた美術工芸の分野に限らず「地に落ちていた」[52]十九世紀から二十世紀にかけてのヨーロッパの姿に関する我々の見解を補強するために，ここで日本人の発言を瞥見したい。

1）岡倉天心：„The Book of Tea“（『茶の本』）

„The Book of Tea“（『茶の本』）は，ニューヨークのフォックス・ダフィールド社から 1906 年に出版された。[53]それ故，岡倉天心の „The Book of Tea“（『茶の本』）の出版年とリルケの „Die Aschanti“ が初めて掲載された『形象詩集』第二版の出版年 (1906 年) を考えると，両者の発表年は偶然にも同じであり，19 世紀ヨーロッパの堕落と野蛮が引きずられていた時代である，と言える。事実，その第一章「人情の碗」(The Cup of Humanity) だけでも読めば，岡倉天心の抗議が欧米の文化の堕落と野蛮に向けられていることは，すぐに理解できる。岡倉天心は次のように言っている。

The average Westerner, in his sleek complacency, will see in the tea

ceremony but another instance of the thousand and one oddities which consistitute the quaintness and childishness of the East to him. ...
When will the West undersatand, or try to understand, the East? We Asiatics are often appalled by the curious web of facts and fancies which has been woven concerning us. We are pictured as living on the perfume of the lothus, if not on mice and cockroaches. It is either impotent fanticism or els abject voluptuousness. ... It has been said that we are less sensible to pain and wounds on account of the callousness of our nervous organisation!
... Unfortunately the Western attitude is unfavourable to the understanding of the East. The Christian missionary goes to impart, but not to receive. Your information is based on the meagre translations of our immense literture, if not on the unreliable anecdotes of passing travellers. ...
... We(Japanese and European)have developed along different lines, ... we (Japanese)have created a hormny which is weak against aggression. Will you believe it? —the East is better off in some respects than the West! [54)]
(普通の西洋人は，なめらかな自己満足にひたって，茶の湯に，東洋の珍奇と稚気を構成する無数の風変わりなもののさらに一例を見るにすぎないであろう。・・・

いつになったら西洋人は東洋を理解するだろうか。理解しようとするだろうか。われわれアジア人種は，われわれに関して識られた事実と空想をこきまぜた奇怪な話に，肝を冷やすことが多い。アジア人は，ねずみと油虫を食べて生きているのでなければ，蓮の香りを吸って生きていると思い描かれている。無気力な狂信か，さもなければ，目もあてられぬ淫蕩である。・・・アジア人は神経組織が鈍いために，傷や痛みを感じることがすくないのだ，と言われてきた。
・・・不幸なことに，西洋の態度は東洋を理解するのに好ましいものではない。キリスト教の伝道師は授けようとするが，受けとろうとしない。あなた方の知識の拠りどころは，行きずりの旅行者の信頼できない逸話でなければ，われわれの膨大な文学の中のごくわずかの翻訳である。・・・
・・・西洋と東洋は異なった方向に発展してきた（。）・・・われわれは，攻撃にたいしてはもろい調和を創造した。あなた方は本当にするだろ

うか，東洋はある点において西洋よりすぐれていることを！[55])

この引用を読めば，特に，「ねずみと油虫を食べて生きているのでなければ，蓮の香りを吸って生きていると思い描かれている。無気力な狂信か，さもなければ，目もあてられぬ淫蕩である」，というアジア人に対する西洋人の偏見を読めば，アジア人に対する西洋人の目と，アシャンティ族の人々に対する西洋人の目とはほとんど同じである，と言え，それ故，岡倉天心の西洋人に対するこの抗議は，アジア人と同時にアシャンティ族の人々の弁護であり，その失権回復である，とも言える。

2）森田雅子：『貞奴物語　禁じられた演劇』

1900年にパリで行われた第5回万国博覧会の舞台に立った貞奴は，アシャンテの女たちとは正反対に絶賛され，時のフランス大統領から名誉この上ない薔薇の花束を贈られたり，オフィシエ・ド・アカデミー勲章を贈られたりした。そのうえ，貞奴が着ていた衣装に似せた奴ドレスが流行したり，貞奴の名前を冠した香水までも販売された。また，大げさに言えば，貞奴の一挙手一投足が雑誌や新聞でも記事にされるなど，芸術家として貞奴はパリ中を虜にした。[56] 貞奴に対するこのような西洋の対応は全くの例外であった。森田は次のように言っている。

> 写真の発明は・・・知性・容貌・体位に関する欧米の白人種の優越性を証明するために利用された。・・・(文化)人類学がこの白人種を最上位に位置づける「美的規範」の正当化に利用されていった（。）
>
> カール・ハーゲンベックは当時その種の異国の人種や猛獣の見世物世界では一番活発な興行師の一人であった。・・・1870年以降，彼は「フェルカーシャウェン(Völkerschauen)」，すなわち人種の見世物という企画に着手し，まずはドイツにトナカイと橇付きでラップ人の家族を連れてきたという。・・・ハーゲンベック自身はこのような行為は見る側，そして見られる側双方にとって有益であると信じている。・・・しかし・・・こうした見世物がこの偏見を「正しい知識」として強化するものである。アフリカ，アメリカ，アジアそれにヨーロッパの周辺地域からヨーロッパに運ばれた「文化村」は「動物園」に喩えられたが，まさに当を得ていた。・・・特に問題なのは，西洋文化

に属さない文化圏のもので，理解を超えるもの，あるいは大きく異なるものを直ちに原始的，稚拙，劣等，無価値，荒唐無稽などと一笑に付す態度である。・・・
このように非西洋文化に関する差別的偏見が蔓延していた時代に，貞奴が何らかの標本ではなく，芸術家あるいは女優として認められたこと自体が驚くべきことである。[57]

自分たち白人を最優秀の人種と価値評価し，その文化を最上位に位置づけ，その価値の絶対性を疑うことはなかった西欧人は，その他の有色人種を劣等な人種として見下し，その文化の価値を「原始的，稚拙，劣等，無価値，荒唐無稽」と否定した。しかし，西欧人は，文化人類学を騙って，アシャンティの人々を西洋文化に順化させるために，「人間動物園」(Zoos humains) に閉じ込め，「快楽の対象」として，金を払ってまでも，「性愛」ショウを見物し，このようにして自ら文化的に蛮行を犯したが，それにもかかわらず，それを認識せず，反対に自惚れや虚栄心を満足させたのである。これは，西洋人が，自分たちの文化が既に地に落ちて久しい，という現実から目を背けるための口実，自己欺瞞でしかない。これをニーチェは「神は死んだ」[58] と言い，シュペングラーは『西洋の没落』[59] と言い，リルケは星座や秩序を形成する「中心を喪失した」(ohne zentrale Stelle)「病んだ世界」(le monde qui est malade) [60] と言い，ハンス・ゼードルマイヤーは『中心の喪失』[61] と言い，ハイデガーは「精神的絶望」の時代[62]，あるいは，ヘルダーリンを引用して「乏しき時代」[63] と言ったのである。

V

最後に残された問題は，リルケの詩 „Die Aschanti“ の „die Munde zum Gelächter breit“ で用いられている „Gelächter“ の意味を決定し，„die Munde“ を大きく開けている人物たちを確定する事である。

1）従来の，„die Munde“ を大きく開けている人物たちを „Aschanti“ とする解釈について：

この解釈では，第一に，第 4 連の最初のこの 1 行が一字分下げて印刷されている理由を説明することはできない。もしも，それがアシャンティの

女たちの口であるならば，わざわざ一字分下げて印刷する必要性は全くない。特別なことはないのであるから，普通に印刷すれば事足りる。

第二に，第1連から第3連までのアシャンテイの女たちと関連する言葉 „keine Vision, kein Gefühl, keine wilde fremde Melodie, keine Lieder, kein Blut, keine braunen Mädchen, keine Augen“ の全てには否定冠詞 „kein“ が用いられている。このことは不定冠詞の複数形，すなわち不特定の複数の人間としてアシャンテイの女たちが扱われていることを意味する。従って，否定冠詞 „kein“ が一貫して使用された後で，唐突に定冠詞を付けた „die Munde“ が，連を新たにして，しかも一字下げて，あたかも特定された別な事柄が対象として出現するかのように，新たに出現することは不自然すぎる。

第三に，„Zoos humains“ （人間動物園）に閉じ込められ，人格を否定され，「人類学の名を借りた観察対象物」(ethnologisches Anschauungsobjekt)[64] として，野蛮な西洋人の好奇な目に晒され，また，「快楽の対象」とみなされ，金を受けとって「性愛」ショウを披露し，それを眺める西洋人の虚栄心を満足させるアシャンティの女たちが，「口」(die Munde) を「大きく開いて」(breit)「晴朗快活な高笑い」(Heiterkeitsausbruch) としての „Gelächter“ を行うことなどできない。もしも，このような状況下に置かれたアシャンティの女たちが「晴朗快活な高笑い」をしている，とリルケが言うのであれば，我々は詩人リルケの人格を疑わざるを得ない。

また，„Gelächter“ を，「他人の欠点や不完全な点について，ざまあ見ろと喜び，軽蔑の表現をし，他人の感情を茶化す態度」を示す „Spott“ と解釈したとして，さらに，「公然たる Spott に結びついた，あからさまな軽蔑の発言で，同時に自分の優越感が表現されている」„Hohn“ と解釈したとして，「訓化園」(Jardin d'Acclimatation) にとらわれているアシャンティの女たちは，金を受けとって「性愛」ショウを披露しながら，見物している西洋人に対して「ざまあ見ろと喜び，軽蔑の表現」をし，あるいは，さらに，「尊大な軽蔑」と「自分の優越感」を「大笑い」によって表現することができるのか，大いに疑問である。もしも西洋人のように近代的自我に目覚め，近代理性を持ち合わせているならば，アシャンティの女たちは „Spott“ または „Hohn“ をすることができるであろう。しかし，残念ながら，熱帯の動物のように「人間動物園」(Zoos humains) に閉じ込められ，金を受けとって「性愛」ショウまでも披露している状況を考えれば，アシャン

ティの女たちにできることは自虐の笑い，自己冷笑であろう。しかし，この行為のほうが，更に自己を見つめることができる近代的自我と近代理性の冷徹な目を必要とする。しかし，残念ながら，この目がアシャンティの女たちには欠如している。そして，この目の欠如という間隙を突いて，西欧世界は非西欧世界で蛮行を 400 年間も続けてきた。ここに西欧人の野蛮と自惚れや虚栄心という複合心理が存在し，それをリルケは詩的言語を用いて形象化しているのである。

2）„die Munde“ を大きく開けている人物を „Aschanti“ 以外にいるとする解釈について：

「人間動物園」(Zoos humains) に閉じ込めらた「人類学の名を借りた観察対象物」(ethnologisches Anshauungsobjekt) であるアシャンティの女たちのさまざまなショウを見ている西洋の男たちの自惚れと虚栄心を表す笑いは，既に明らかにされたように，「晴朗快活な高笑い」(Heiterkeitsausbruch) ではなく，「公然たる Spott に結びついた，あからさまな軽蔑の発言で，同時に自分の優越感が表現されている」„Hohn“ の笑いである，すなわち，軽蔑の笑い，「嘲笑」である。欲望と自惚れと虚栄を満たすために，金を払ってさまざまな種類のショウをアシャンティの女たちに行わせて鑑賞している西欧の男たちは優越感に浸りながら彼女たちを軽蔑し，口をいっぱいに開けて嘲笑しているのである。

ところで，10 行目で „und die Munde zum Gelächter breit“ と言った後，12 行と 13 行で，„Und ein wunderliches Sich-verstehen / mit der hellen Menschen Eitelkeit“ と言っているが，ここで突然，初めて，„die Munde“ と同様に，「西洋人」を意味する定冠詞を付けた複数名詞 „die hellen Menschen“ が現れる。もしも，9 行目の „keine Augen, die wie Waffen flammten,“ と同様にアシャンティの女たちの「口」を示すのであれば，それは無冠詞の複数形，すなわち，„Munde“ であらねばならない。しかし，„die Munde“ と定冠詞が付けられていることは，アシャンティの女たちの口ではなくて，特定された者の口を意味する。そして，この場合定冠詞を付けて特定されているのは，„die hellen Menschen“ しかない。この文法事項からも，„die Munde“ の所有者が „die hellen Menschen“ であることは明らかである。

VI

最後に結論として，次のように言うことができる：欲望と自惚れと虚栄を満たすために，金によってさまざまな種類のショウを，「性愛」ショウさえも演じさせ，常夏のパラダイスであるアフリカから連れてこられ，「人間動物園」(Zoos humains) に閉じ込められ，「人類学の名を借りた観察対象物」(ethnologisches Anschauungsobjekt) であるべく強制されたアシャンティの女たちと，その女たちを嘲笑う西洋の男たちの姿は絶対に見たくもない，忌避されるべき現実である。それにもかかわらず，両者の間には軋轢は存在せず「奇妙な馴れ合い」(ein wunderliches Sich-verstehen) さえも成立しているのである。この「奇妙な馴れ合い」が成立するためには，アシャンティの女たちと見物する西洋の男たちという対立する両者の間に連続性が成立していなければならない。この二律背反的な「奇妙な馴れ合い」を成立させる両者の「対立」と「連続性」，いわば，「不連続の連続性」を表現するために，第三連の末尾はコンマで終わらせられ，続く第四連は，小文字のまま一字分下げて „und die Munde zum Gelächter breit“，と書かれたのである。

しかし，ここにはさらなる悍ましさが両者の関係の背後には隠されている，すなわち，金を受け取って「性愛」ショウを見せるアシャンティの女たちも金を支払ってそのショウを鑑賞する西洋の男たちも「中心の喪失」の時代という世紀末の舞台の上で虚妄という役割を共に演じる仮面群でしかない。そして，わずか 1 行だけで第五連を形成している続く第 13 行はこの虚妄の舞台の悍ましさをさらに際立たせる機能を果たしている。リルケは次のように言っている。

Und mir war so bange hinzusehen.

すなわち，リルケは，詩人以前に，人間として，西洋の男たちとアシャンティの女たちとの間の悍ましい「奇妙な馴れ合い」を見るのが恐ろしかったのである。従って，この虚妄の存在に比べれば，必然的に，「コンゴから連れてこられ，凍えている動物」(ein ... frierendes Thier, vom Congo gebracht)[65] であるのにもかかわらず，「檻の中を行き来する動物たちはなんと遙かに忠実なことか」(O wie sind die Tiere so viel treuer, / die in Gitteren

auf und niedergehn), という思いに詩人は駆られるのである。全8行からなる最終連はこの思いを展開させている。

最後に結語のまとめとして試訳を提示しおきたい。

異国のイメージもなかった,
ずり落ちる腰蓑の中から踊り上がる
褐色の肌の女たちの感じもなかった。

激しい異国のメロディーもなかった。
血潮の中から響く歌もなかった。
心奥から叫ぶ血もなかった。

熱帯のけだるさにビロードのように
身を伸ばす褐色の肌の少女たちもいなかった。
刃のように光る目もなかった,

　　しかし，嘲笑のために大きく開いた口があった。
そのうえ，その白人たちの虚栄との
奇妙な馴れ合いさえもあったのだ。

それだから僕は見遣るのが不安だった。

嗚なんと，檻の中を行き来する動物たちは
遙かに忠実なことか。
かれらは，理解できない異邦の事物が
あらたに生起しても，和することなどしない。
むしろ，かれらは静かな炎のようにそっと
燃え尽き，己が内へと消え入る。
あらたな冒険には見向きもせず,
共にあるは，己の偉大なる血だけだ。

注

1)『十九世紀ドイツ文学研究会・研究報告集』 編集十九世紀ドイツ文学研究会　郁文堂　1992 年。569 ～ 570 頁。(＝研究報告集)

2)『文藝研究』第 61 巻　慶應義塾大学文藝会編　1992 年。194 (61) ～ 210 (45) 頁。(＝研究報告集)

3) http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-006100010210 (2017 年 11 月 19 日)

4) 研究報告集, 568 頁。

5) 文藝研究, 209 (46) ～ 208 (47) 頁。

6) Ulrich Baer: Das Rilke-Arphabet. (Suhrkamp) Frankfurt am Main 2006. S. 17ff.

7) ここでハイデガーが扱っているのはヘルダーリンの詩 „Andenken“ である。

8) ベールが引用したハイデガーの本文は次のようになっている。
Die Liebe zum Unheimischsein umwillen des Heimischwerdens im Eigenen ist das Wesensgesetz des Geschickes, durch das der Dichter in die Gründung der Geschichte des »Vaterlandes« geschickt wird. (Martin Heidegger: Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung. Vierte, erweiterte Auflage. (Vittorio Klostermann) Frankfurt am Main 1971. S. 87.)

9) vgl. Rilke-Kommentar zum lyrischen Werk von August Stahl unter Mitarbeit von Werner Jost und Reiner Marx. (Winkler) München. 1955, 11. bis 13. Tausend 1978. S. 138. (= R-K)
vgl. Rainer Maria Rilke: Werke. Kommentierte Ausgabe in vier Bänden. Hrsg. v. Manfred Engel, Ulrich Fülleborn, Horst Nalewski, August Stahl. Bd. 1, (Insel) Frankfurt am Main u. Leipzig 1996. S. 787f. (= KA)

10) Rainer Maria Rilke: Briefe an Axel Juncker. Hrsg. v. Renate Scharffenberg. (Insel) Frankfurt am Main 1979. S. 193.

11) Rainer Maria Rilke: Sämtliche Werke. Hrsg. v. Rilke-Archiv in Verbindung mit Ruth Sieber-Rilk, besorgt durch Ernst Zinn. Erster Bd. (Insel) Frannkfurt am Main 1970. S. 853. (= SW)

12) KA: S. 788.

13) SW: S. 394f.　太字と下線は著者による。

14) KA: S. 278.　太字と下線は著者による。

14a) SWI, S.779.

15)『リルケ全集』第1巻　訳者代表　富士川英郎　彌生書房　1961年。129-139頁。1973年。
16)『リルケ詩集』世界の詩集7　富士川英郎訳　角川書店　1967年。62-63頁。
17)『リルケ全集』第2巻　詩集Ⅱ　塚越　敏監修　河出書房新社　1990年。348-349頁。
18)『新訳リルケ詩集』富岡近雄訳　郁文堂　2003年。137頁。
19) R. Klappenbach / W. Steinitz: Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. 6 Bde. Berlin 1964-77.
20) Brockhaus-Wahrig: Deutsches Wörterbuch. 6 Bde. Wiesbaden / Stuttgart 1980-84.
21) Duden. Der große Wörterbuch der deutschen Sprache in 8 Bänden. Bd. 3. 2. völlig neu bearb. u. erw. Aufl. Mannheim / Leipzig / Wien / Zürich 1993 - 1995.
22) Johan Christoph Adelung: Versuch eines vollständigen grammatisch-kritischen Wörterbuches der hochdeutschen Mundart. Zweyter Theil. (Breitkopf und Sohn) Leipzig 1775. S. 516.
23) Jacob Grimm und Wilhelm Grimm: Deutsches Wörterbuch. IV, I, 2. (Hirzel) Leipzig 1897. S. 2843-2844.
24) Joh. Christ. Aug. Heyse: Handwörterbuch der deutschen Sprache. Erster Theil. (Wilhelm Heinrichshofen) Magdeburg 1833. S. 534.
25) Moriz Heyne: Deutsches Wörterbuch. Erster Band. (Hirzel) Leipzig 1905, (Sansyusya) Tokyo 1973. S. 1081-1082.
26) Johann August Eberhard: Synonymisches Handwörterbuch der deutschen Sprache. (Th. Grieben) Leipzig 1910, (Sansyusya) Tokyo 1983. S. 569.
27) Heyne, Bd. 1, S. 1147.
28) Grimm:a. a. O., S. 4160.
29) Heyse, Zweiten Theils zweite Abtheilung. S. 998-999.
30) 日本国語大辞典　第二版　第十三巻，小学館　2001年，1050頁。
31) 同上　第四巻，1250頁。
32) A. Pinloche: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. (Larousse) Paris 1930. S. 228.
33) Eberhard, S. 658.
34) 中條宗助：ドイツ語類語辞典　第二版　三修社　1996年，700頁。
35) Peter Altenberg: Aschantee. (Mit Wiener Thiergaten bei den Negern der Goldküste,

Westküste.) (Fischer) Berlin 1897. S. 3-4.
ところで著者が所有するマイヤーの百科事典は 1907 年に出版された第六版 (Sechste gänzlich neubearbeitete und vermehrte Auflage) であり，タイトルには変更が加えられて，„Meyers großes Konversations-Lexikon. Ein Nachschlagewerk des allgemeinen Wissens. (Bibliographisches Institut) Leipzig und Wien“ となり，„Aschanti“ の項にも大幅な改訂が施されている。

36) Piepers Universal-Conversations-Lexikon. Neustes encyklopädisches Wörterbuch aller Wissenschaften, Künste und Gewerbe. Sechste, vollständig umgearbeitete Auflage. Bd. 1. Oberhausen und Leipzig 1875. S. 799.

37) Lou Albert-Lasard: Wege mit Rilke. (Fischer) Berlin 1952. S. 131.

38) KA, S. 621.

39) Rainer Maria Rilke: Gesammelte Briefe in sechs Bänden. Erster Band. Briefe aus den Jahren 1892 bis 1904. (The Rinsen Book) Kyoto 1977. S. 28.

40) Detlev von Liliencron: Der Heidegänger und andere Gedicete. (Schester & Loeffler) Berlin 1895. S. 82.

41) Erich Unglaub: Panther und Aschanti. Rilke-Gedichte in kulturwissenschftlicher Sicht. (P. Lang) Frankfurt am Main 2005. S. 158, Anm. 450.

42) Vgl. A.a.O., S. 100.

43) KA, S. 811.

44) ロベール仏和大辞典　小学館　1996 年，17 頁。

45) Zoos humains. Au temps des exhibitions humaines. Sous la direction de Nicolas Bancel Pascal Blanchard, Gilles Boetsch, Éric Deroo, Sandrine Lemaire. (La Découverte) Paris. 2004. なお，2 年前には同編著者たちによって次の研究書も出版されている。Derselbe: Zoos humains de la vénus hottentote aux reality shows. (La Découverte) Paris. 2002.

46) Unglaub, S. 103.

47) Egon Voss: Ist Carmen, was wir von ihr glauben? In: Georges Bizet: Carmen. Text, Materialien, Kommentare. Hrsg. v. Attila Csampai und Dietmar Holland. (Rowohlt Taschenbuch Verlag) Reinbek bei Hamburg 1984. S. 25.

48) John Steinbeck: America and Americans. Photographs edition. (The Viking) New York. 1966. S. 58.

49) SW I, S. 722.

50) 日夏耿之介　詩集咒文　再刻版　1966年,(頁番号なし,詩「塵」の3頁目)。日夏耿之介全集　第一巻　河出書房新社　1973年,388頁。

51) Friedrich Nietzsche: Werke. Kritische Gesamtausgabe. Hrsg. v. G. Colli u. M. Montinari. Fünfte Abteilung. Zweiter Band. (de Gruyter) Berlin 1973. S. 255. Und vgl. die Seite 158-9. Dort heißt es: „Wohin ist Gott? rief er, ich will es euch sagen! Wir haben ihn getötete, - ihr und ich! Wir all sind seine Mörder!"

52) Siegfried Wichmann: Japonismus. Ostaien - Europa. Begegnungen in der Kunst des 19. und 20. Jahrhunderts. (Schuler) Herrsching 1980. S. 8. „Samuel Bing hatte seine Zeitschrift »Le Japon Artistique« mit der Überlegung gegründet, dem daniederliegenden europäischen »Kunstgewerbe« einen neuen Halt - ein Vorbild zu geben."

53) 岡倉天心の »The Book of Tea« のドイツ語訳は,『リルケ・K. キッペンベルク往復書簡集』(Rainer Maria Rilke / Katharina Kippenberg: Briefwechel. (Insel) 1954.) の注（635頁）によると，1922年にインゼル出版社から豪華本 (Vorzugsausgabe) として出版され，その後「インゼル文庫」(Nr. 247) の一冊に組み入れられた。手元にあるその豪華本を見ると和綴じになっており，そのタイトルは，„Kakuzou Okakura: Das Buch vom Tee. Mit zwanzig Lithographien von Georg A. Mathéy"，となっており，表題の下の空白をリトグラフが飾っている。しかし，リルケがこの豪華本を手にしてはいないようである。なぜならば，ネルケ夫人宛の手紙では「それから私たちは一緒にお茶の小型本 (das Thee-Bücherrei) を読みました」(Br. an Frau Gudi Nökle v. 31. Oktober 1922）と言っているので，インゼル文庫を想起させる言葉使いをしているからである。ここでは，リルケと『茶の本』の関連については，別なテーマになるので，深く立ち入らない。
なお，英語の再版は1919年に出版された。

54) Okakura Kakuzou: The Book of Tea. (Fox, Duffield & Company) New York 1906. (Applewood Books) Bedford, Massachusetts 2008. S. 7, 8, 11, 12.

55) 岡倉天心：茶の本（英文収録）（樋谷秀昭　訳）講談社　1994年，15~19頁。講談社学術文庫。下線は著者による。

56) 森田雅子：貞奴物語　禁じられた演劇　ナカニシヤ出版　2009年，95-97頁参照。

57) 森田雅子：124 -126頁。

58) Friedrich Nietzsche: Werke. Kritische Gesamtausgabe. Hrsg. v. G. Colli u. M. Montinari. Sechste Abteilung. Erster Band. (de Gruyter) Berlin 1968. S. 8

59) Oswald Spengler: Der Untergang des Abendlandes. Umrisse einer Morphologie der Weltgeschichte. (C.H.Beck) München 1923, Nachdruck 1973.

60) Rainer Maria Rilke: Briefe aus den Jahren 1914 bis 1921. Hrsg. v. Ruth Sieber-Rilke u. Carl Sieber. (Insel) Leipzig 1937. S. 293. Dort heißt es: so bilden sich Spannungen und Gegenspannungen ohne zentrale Stelle, die sie erst zu Konstellationen macht, zu Ordnungen, wenigstens Ordnungen des Untergans. ... C'est le monde qui est malade, et le reste c'est de la souffrance.

61) Hams Sedlmayer: Verlust der Mitte. (Otto Müller) Salzburg 1948. 8. Aufl. 1965.

62) Martin Heidegger: Gesamtausgabe. I. Abteilung: Veröffentliche Schriften 1910-1976. Band 16. Reden und andere Zeugnisse eines Lebensweges. (Klostermann) Frankfurt am Main 2000. S. 50. Dort heißt es: Die überhastete Flucht zu bindenden Dogmen, die Tendenzen auf Erneuerung vergangener Kulturen (Mittelalter z. B.) oder entfernter Kulturkreise (indische Weisheit), die Pflege des Okkartismus sind die deutlichsten Symptome der geistigen Hilflosigkeit der Zeit.

63) Martin Heidegger: Holzweg. 4. Aufl. (Klostermann) Frankfurt am Main 1963. S. 248. Dort heißt es: „... und wozu Dichter in dürftiger Zeit?" Das Wort Zeit meint hier das Weltalter, dem wir selbst noch angehören. Mit dem Erscheinung und den Opfertod Christi ist geschichtliche Erfahrung Hölderins das Ende des Göttertages angebrochen. Und das Wort Hölderlins befindet sich in: Hölderlins sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. Begonnen durch Norbert v. Hellingrath. Vierter Band. Gedichte 1800-1806. Dritte Auflage. (Propyläen) Frankfurt am Main 1943. S. 124.

64) KA, S. 812.

65) Rainer Maria Rilke: TagebuchWesterwede und Paris 1902. Taschenbuch Nr. I. Transkription der Handschrift mit Erläuterungen aus dem Nachlaß herausgegeben von Hella Sieber-Rilke. Einmalige, limitierte Auflage in 1000 Exemplaren. (Insel) Frankfurt am Main und Leipzig 2000. S. 40.